

# 首リンパ腺の新検査法有用

北斗病院(帯広市稲田町基線7)の坂東伸幸副院長(49)をリーダーとする研究グループが取り組んできた首のリンパ腺の腫れを診断する新たな検査法について、有用だったとする同グループの研究成果が米国の医学雑誌「Diagnos tic Cytopathology」の電子版に掲載された。悪性の病気に對する診断率(検体適正率)が90%を超えていることなどを報告しており、坂東副院長は「世界的にも高く評価された表れ」と喜んでいる。

## 北斗病院・坂東副院長の研究グループ



論文が掲載された医学雑誌電子版のコピーを手に喜ぶ研究グループ(前列左が坂東副院長、同右が後藤医師、後列左から臨床検査技師の山口さん、赤羽さん、大貫さん)

「液状処理細胞診」と呼ばれる検査法で、喉を針で刺して血液を吸引し、専用液に入れて遠心機にかけ、ガラスに細胞を付着させて診断する。

坂東副院長によると、乳がんなど他分野で使われていた検査法。北斗は坂東副院長が赴任した

## 米医学雑誌電子版に「地方から発信できた」

場合が多く、検査は必要ない。ただ、残り5%ほどは甲狀腺がんや咽頭がん、悪性リンパ腫といった悪性の病気の場合があり、検査が必要という。全国的な主流の検査は、首に注射して血液を取り、ガラスにすり合わせて血液を乾燥させ、専用液で染めて検体を見る方法で、北斗でも新検査法実施前まで採用していた。「短時間で検査できるが、赤血球が多く混入してしまつたため、検体適正率は75%ほどにとどまる」と坂東副院長。

## 乳がん検査応用、91%で悪性診断

開設された頭頸部腫瘍センターのセンター長に就任した。研究メンバーはほかに、後藤孝医師(耳鼻咽喉科・頭頸部外科)と、臨床検査技師(細胞検査士)の赤羽俊章さん、大貫なつみさん、山口朋美さん。アドバイザーを務めた北大の西原広史特任教授(北斗病院腫瘍医学研究所客員部長)は「新検査は、がんの個別化医療に向け、遺伝子診断にも応用可能。先進医療への取り組みは国内外でも高く評価できる」と力説。坂東副院長は「地方から有用性を発信できたことはうれし。首のリンパ腺の腫れに対し、新検査が行われているのはまだ数施設。今回のことで国内に有用性が広まり、悪性の病気の早期発見につながれば」と話している。(佐藤いづみ)

ライフ

健康

